



5月初旬から中旬にかけて咲く白毫寺の九尺ふじ。花穂は長いもので150cmを超える。

「俗の世界と仏の世界を繋ぐ」といわれる太鼓橋が架かる心字池には数百尾の錦鯉が群れ、山門脇には仏教を守護するという孔雀も飼育しています。

一方、境内の木々や花々も四季を通じて参詣者の目を楽しませています。四月の桜をはじめ、五月の九尺ふじやシヤクナゲ・セッコク、秋の紅葉などが見所で、特に五月初旬の九尺ふじは、全長一二〇m・幅九mに及ぶ巨大な紫のベールとなって人々を優しく包みまします。

団体で参詣の皆様には、本堂で般若心経によるお勤めの後に法話をし、お茶とオリジナルの煎餅をお出しして接待しております。



白毫寺の回向本堂。左脇に楽寿観音様をお祀りしている。

また、藤のシーズンには、九尺ふじの管理をボランティアでお手伝い下さっている「藤の木愛好会」の皆さんが、杵つき餅や山菜おこわ・丹波栗などをテントで販売し、参詣者のもてなしを手伝ってくださいます。

白毫寺は、楽寿観音霊場のひとつとして、大自然と御仏の慈愛に包まれた安らぎの寺を目指しています。皆様方のアドバイスやご指導を賜れば幸いです。

編集後記

このたび「楽寿多与利」第1号に引き続き、第2号を発行することができ、ほっと一息ついております。快く原稿をご執筆下さった祥雲寺様・慈眼院様・安海寺様・白毫寺様には心より御礼申し上げます。

私ごとではありますが、昨年12月4日に初めての子どもを授かりました。観音さまのごとく世を潤す（世の恩恵を受ける）という意味で、「潤世^{じゆんせい}」と命名いたしました。現在、私は育児に励む霊場会事務局です。

寺に帰り、「潤ちゃん ただいま～」と声をかけると、3か月の赤ん坊が“ブッ”とおならで返事をします。それが“佛ッ”と聞こえるのは私だけでしょうか。このような大らかな慈しみのまなざしを持って、参拝者の皆様にも接していけるといいですね。



事務局 Kensho